

第五章 並列關係と所謂複文重文の眞義

言語の觀念的構造には、主從的に結合する從屬關係と對等的に結合する對立關係とがあつた。しかして前者には内屬的に結合する修飾關係と外附的に結合する補充關係とがあり、後者には矛盾的に結合する統合關係と同等的に結合する並列關係とがあるのである。この四つの關係の緊密度を比較すれば略：

修飾關係 $\vee$ 補充關係 $\vee$ 統合關係 $\vee$ 並列關係

の如く考へられ、修飾關係を内に超えればそこに未分的な文法以前の語彙的狀態があり、並列關係を外に超えれば其處は文法活動の斷止せるところで、個々獨立的な文の散在があるのである。前者には單一個々の語彙的觀念とか語義とかといふものがあるに過ぎず、後者には文と文との布置排列、即ち連文とも稱すべきものがあり、それは言語を超えた思想的世界である。故に並列關係は凝縮的な修飾關係とは正反對に最も弛緩せる觀念的關係であると考へられ、そこには多分に思想的なものが入込み、一步外に逸脱すれば單なる思念的活動の世界に顛落するのである。かやうな意味に於ける並列關係とは如何なるものであるか。

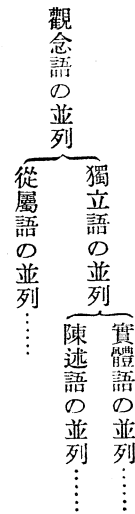
並列といふことは單に同一的なものを重加することではない。反復累加の意味ではない。同等なるもの、同格

的同次元的なるものゝ結合でなければならない。同等なるものとは如何なることであるか。それは語彙的に相異なり、文法的に同一的なるものゝ謂でなければならぬ。その觀念の内實を形造る質料的なものに相違があり、その觀念性的本質を形造る形相的なるものゝ同一的であるといふことでなければならぬ。故に「月、雪、花」の如き結合は並列の關係といふことが出来るが、「純白の雪」の如きものは並列關係ではない。しかも並列關係は單なる「月、雪、花」の如き併存のみではなく、それらの中には又相互に種々の意味を持つてゐなければならぬ。關係義とか文法義とかといったものがその間になければならぬ。例へば「月、犬、石」は外形的に見れば並列せられてあるやうであるが、何等意味なき結合であるから並列關係として考へることが出来ないのである。

並列關係といふのは、かやうに同等的なるものゝ有意味的結合である。統合に至らざる單なる對結である。相矛盾するものに分析し、然る後之を綜合するのではなくて、同等的なるものとして最初から分立せる如きものを種々の意味を以て綜合する關係である。統合關係は力的創造的であるが、並列關係は擴散的展開的である。謂はゞ統合の弛緩せる對結である。しかし文法的意義を全く失つたものでは勿論なく、そこには矢張然るべき結節がなければならぬ。言語的結合性といふものがなければならぬ。單なる孤立的語辭の羅列でもなく、獨立せる文の布置排列の如きものでもない。そこに文法學的對象として考察せらるべき價值が充分に存するのである。

並列關係は種々の方面から眺めることが出来るが、最も本質的な觀點は言語の機能範疇である。勿論之以外には主格とか述格とか修飾格などゝいつた所謂位格から眺めることも出来るであらう。しかしそれらは何れも右の觀點よりするものに包攝せらるべきものである。並列關係を言語の機能範疇によつて眺めるとすると、先づ實體語相

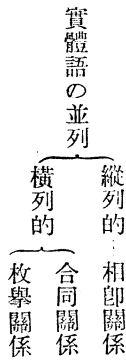
互の並列と陳述語相互の並列は最も主要なものとして擧げることが出来る。之等獨立語のものに對して極めて微少ではあるが從屬語の並列もある。



しかして以上のものの中には又それ／＼種々のものがあるのであるが、一般的には右三つの場合を立てることが出来るのである。しかもそれらには皆何等かの文法素によつて表示せられる特殊な並列相がある筈である。以下かやうなことに就き少しく考察を加へてみよう。

二

實體語相互の並列關係は大略次の如く區別することが出来るのである。



右の中相即關係といふのは、前後がイコール的關係を爲すものゝ縱列である。記號的には相違するも、實體に於て結局同一なるものである。それらの中には

日本一の名山富士　大戦艦陸奥

大將維盛　弟時致　爾臣民

發明王エヂソン　英京倫敦

吾人身を學界に置く者

の如く、兩者の間に何等介入するものなく直結するものもあり、

一尺即ち十寸　ドイツの首都即ち柏林

の如く「即ち」などの接續詞、或は「言ひ換へれば」とか「換言すれば」などの如き接續的連語を介入せしめるものもある。

合同關係といふのは幾つかの類同的觀念を取纏め一括せんとする關係である。之にも

東京大阪京都　東京・横濱・川崎

の如く、兩者の間に何等特別に介入せしめるものゝないものと、助詞又は接續詞の介入によつて連結を助けるものがある。

合同關係の助詞には與同的な「と」と重加的な「に」とがある。「と」は差支のないものでは

東京と大阪と名古屋……

の如く、その連結點だけに置いてよいのであるが、正しくは

東京と大阪と名古屋と……

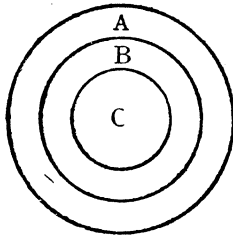
の如く、並列せしめる體言毎に下接すべきものである。殊によく引合に出される例であるが、

史記と漢書の列傳

のやうに（史記と漢書の）＋（列傳）であるか、或は（史記と）＋（漢書の列傳）であるかはつきりしないやうなものは、必ず「史記と漢書との列傳」或は「史記と漢書の列傳と……」などとしなければならぬ。「と」に依る並列は各要素が



の如き關係に立つのであるが、「に」に依る並列は各要素が、



の如き關係に立つのである。例へば

第五章 並列關係と所謂複文重文の眞義

月に叢雲花に風。 竹に雀牡丹に唐獅子。

あなたにわたくしにこの方にすべて三人です。

の如く、在るものゝ上に更に重累させて行くのである。

合同關係に接續詞を介入せしめたものにも矢張與同的なものと重加的なものがある。與同的なものには

金銀銅及び白銅は貨幣に用ひる。

金閣並に銀閣は足利氏の建てたるものなり。

向島さては上野の花も已に過ぎたり。

太郎君と次郎君とそれから花子さん。

の如きものがある。重加的なものには

山又山を越えて

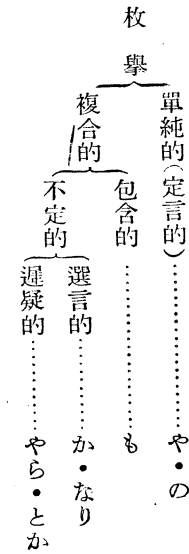
あなたにわたしにそれにあの方

おまへのやら私のやらそのうへにこの子のまで

の如きものがある。

枚舉關係といふのはその横列的な點に於て合同關係のものと似てゐるが、合同關係は幾つかの要素を取纏め一括せんとするものであるのに比し、之は單なる並列である。即ち前者は集約的であるが後者は放散的である。しかしてこの枚舉關係では、その間に何等介入することなきものは合同關係と別に變つたところがないのであるが、助

詞とか接續詞とかといふものが介入して來ると、そこに種々の枚舉的意義が顯現せられて來るのである。殊に助詞の力によつてその特殊相が發揮せられるのであるが、大略次の如く區別することが出來ると思ふ。



「や」「の」を用ひるものゝ例

牛乳は蛋白質や澱粉や脂肪を含んでゐる。

ねだんの高いのや安いのや色々ある

あれやこれやで御無沙汰致しました。

後見や何やとかねておぼしかはすとも (源氏、竹川)

四の五のと文句をいつた。

死ぬの生きるのといふ騒をした。

今更よいの悪いの何のかのといふことは承知がならぬ。

「も」を用ひるものゝ例

桃も櫻も一時に咲いた。

おとうさんにもいさんも丸山君も妹もお松もみんな下りた。

いろ／＼の蟲はそつちにもこつちにも節おもしろく鳴いてゐる。

石垣の間でも地藏様のかけでも辻堂のえんの下でも花が咲く。

これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關。

「か」「なり」を用ひるものゝ例

君か僕かさへ承知すれば出来るのだ。

あれは梅か桃でせう。

それかこれかどちらかを貰はう。

讀みか書きかする。

雲か山か呉か越か。

君なり僕なりが承知すればよいのだ。

行くなり来るなり勝手にしろ。

「やら」「とか」を用ひるものゝ例

何やらかやら譯がわからぬ。

犬やら狼やらわかりません。

十人やら五人やら所々に集まつてゐる。

踊るやら跳ねるやら大騒です。

おまへのやら私のやら色々まざつてゐる。

官僚とか軍閥とかといふものが跋扈してゐる。

何とかかんとか言つてゐる。

之等に接續詞が介入すると一層意味が強化せられる。例へば

フランス語やドイツ語や或は支那語などをやつてゐます。

學用品や教科書や又は玩具類などを賣る小ぢんまりした店。

陸軍又は海軍。 山或は川へ。

歌か詩かそもそも畫か。

海濱もしくは山中に行かん。

日光か鹽原がさもなくば湯河原にしよう。

犬やら猫やら或は山狐やらさつぱり見當がつかなかつた。

出るやら這入るやら或は喧嘩やらで散々な騒だつた。

三

陳述語の並列關係は種々雑多のものがあつて、極めて複雑である。故に、並列關係に於ける具體的考察の主力は常

にこゝに注がなければならぬのである。先づ之を單純に同格的連用を爲すものと、種々複雑な意味性を持つて前件後件が並列するものとに區別することが出来る。しかしこの項では前者に就いて考へてみることにする。

陳述語が單純に同格的連用をするものといふのは、動詞とか形容詞とか、或は賓位觀念を持つた形式動詞などの重加累疊である。それらの中

走り過ぎる。 行き着く。 咲き亂れる。

吹き強る。 あふり立てる。 向き直る。

白く美しい。 勇ましく面白い。 高く尊い。

清くさやかである。 綺麗で小ぢんまりしてゐる。

の如く、陳述語が單獨的に並列關係に立つものが基本的であるが、此の場合動詞の方はその現象的觀念が相互に合融して熟語的にならうとする傾向を持つことが多い。その中

とり亂す。 かき曇る。 相成る。

の如く前輕後重のものは修飾關係的となるのである。又

讀みにくい。 言ひにくい。

書きやすい。 買ひよい。

の如く動詞の下に形容詞の附くものは前重後輕となり、而してかやうなところから「讀みたい」「書きたい」などの助動詞「たい」「たし」が生じたものとも考へられる。

かやうな陳述語の並列關係に於ける並列的意義が分明となる道には大體二つある。その一つは各陳述語にそれぞれ修飾語とか補語とか主語とかが關係する場合である。例へば

いよ／＼高く、いよ／＼尊い。

人生の感は花を見て益繁く、雪を見て愈多い。

甲板洗はいかにも勇ましく面白ものである。

冷水浴は皮膚を強くし、したがつて體を強くし心を爽にする。

氏は又朋友に篤く部下に親切であつた。

一匹の野兎が耳を立て、脚を揃へて叢からとび出しました。

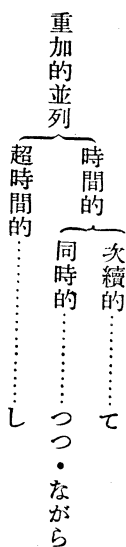
忽ち水が二尺になり、三尺になり、五尺になりました。

花咲き鳥歌ふ。

先生も來られ、奥様も御出でになりました。

の如きものである。右の中「花咲き鳥歌ふ」のやうに主語の現れた陳述語を並列せしめたもの、即ち統合關係の並列重加を普通に重文など、稱してゐる。

次に種々の助詞或は接續詞の如きものを介入せしめるものである。之には大略次の如きものを擧げることが出来る。



「て」は元來助動詞「つ」の連用形であるが、現在ではその用法範圍が極めて廣く「つ」の體系から離れて獨自に發達して來てゐる。殊に「つ」の行はれない口語にあつては、單に次續的連用を表示する助詞の如くなつてゐるのである。随つて

人夫にかつがせて來た。

子供が泣いてゐる。

卷いて流れて、流れて卷いて。

の如き動詞につくものは勿論

小さくてかはいらしいのは春の野に咲くれんげです。

しかしすくねもつよくてすばしい人でした。

ずつと大きくて立派である。

うれしくてうれしくてたまりません。

の如く形容詞の連用形にもつく。又

朝早く起きて急いで出かける。

倫敦の冬は日が短くて霧が多くて誠に鬱陶しうございます。

夜は川下の方へ流れて曙の光は四邊に満ちてゐる。

天地の大觀に覺えず吾を忘れて眺めて居たが、促し立てられて船に歸つた。

の如く陳述語に修飾語、補語、主語などが關係し分析的となつたものはその並列的意義が一層分明である。文語ではかやうな「て」が

桃は紅に、柳は綠に、春の風ゆるやかに吹く。

風さわやかに、氣清し。

などの「に」につき

桃は紅にて、柳は綠にて……

風さわやかにて……

或は

桃は紅にして、柳は綠にして……

風さわやかにして……

の如く「にて」「にして」の形をとることがある。之は口語では

あれは櫻で、これは桃だ。

天氣も穏かで、氣候ものどかだ。

の如き「で」となつてゐる。しかしこの「で」を

みんなよろこんで遊んでゐた。

飛んで火に入る夏の蟲。

などの、「て」の連濁形と區別しなければならぬことは勿論である。又「にして」に對立して天地寂莫として、四隣に聲なし。

の如き「として」がある。しかし「とて」の方は

人知るまじとて欺くは妄なり。

の如く別系統のものとして成立したものである。

「て」は次續して行く並列關係を示すものであつたが、「つつ」と「ながら」は同時的併存の並列關係を示すものである。その中「つつ」は主として文語に用ひられ、「ながら」は口語にのみ用ひられる。

「つつ」を用ひるものゝ例

きこゆべきこともなくて打ちなげきつつゐたり。(源氏・夕霧)

墓に行きて物いひつつぞ歸りける。(今昔)

並べよせつつあるぞいとをかしき。(蜻蛉)

禪尼手づから小刀してきり廻しつつ張られければ (徒然)

いと限りありつつ及ばざりけりや。(源氏・若菜上)

「ながら」を用ひるものゝ例

しかられながら笑つてゐる。

うたれながら逃げて行く。

これ程貧しい暮しをしてゐながら、こんな大金があるのになぜ今まで話さなかつた。

以上三つは先行陳述語の連用形に添加せられ何れも時性に關係あるものであつたが、次に「し」は之に反して終止形に添加せられ、時性に關係なく寧ろ之を超越して重加並列せしめるものである。例へば

夏は涼しいし冬は暖い。

雨も降るし風も吹くし今日は止さう。

電話は不通だし郵便は遅いし仕様がなない。

読みもするし書きもする。

の如きものである。

接續詞を介入せしめるものは例へば次の如きものである。

読み通し、さて寫し取る。

學問もあり、さうして見識もある。

敵におそはれる心配も少く、又こちらから敵をおそふのにも都合がよい。

山を越え、又水を渡る。

物價も安いし氣候もよいし、それに交通も便利だ。

志堅く、且望大なり。

水害にかゝり將又病人ありて難儀せり。

四

種々複雑な意味を持つて前件と後件とが連結する複合的並列關係は、其の關係性によつて綜合的傾向のものとな析的傾向のものとの區別することが出来る。そこで先づ綜合的なものゝ方から考察する。綜合的なものゝ中その並列せられる要素の輕重關係によつて、前件後件の同等的なるものと、その輕重に差異あるものゝに分つことが出来る。後者は更に前件軽く後件重きものと、前件重く後件輕きものとに區別することが出来るのである。

前件と後件との輕重が同等的に綜合せられんとする陳述語の並列は先行陳述語の連體形に助詞「が」が添加せられる形を基本とし、其の他「ところ」「もの」「ものから」等の添加せられるものもある。

「が」を用ひるものゝ例

ありがたいが、おことわりませう。

それもよいが、だれがそのすゑをつけに行くのか。

鬼の大將はいつしやうけんめいに戦ひましたが、とう／＼負けました。

さうして無理に犬をなかせて鼻を掘つてみましたが、きたないものばかり出ました。

一寸ばふしは針の刀を抜いて鬼に向かひましたが、とう／＼つかまつてしまひました。

風は寒いが、天氣がよい。

今日事なかりしが明日如何ならむ。

簾の内に矢をつまよる音のするが、その矢の來て身にたつ心ちして（宇治拾遺）

「ところが」を用ひるものゝ例

そんなことをいつたところが仕様がなないぢやないか。

來たところが一人か二人だ。

昨日公園に行つて見たところが花はもう散つてゐた。

行つてみたところが見もしらぬ人であつた。

「ものの」を用ひるものゝ例

さうは言ふもののやりたくないのだらう。

折角來たもののこれでは仕方がない。

うつせみのよの人言のしげければわすれぬもののかれぬべらなり。（古今・十四）

なく聲のきこえぬもののかなしきはしのびにもゆる螢なりけり。詞花・二）

「ものから」を用ひるものゝ例

こめやとは思ふものからひぐらしの鳴く夕暮は立ち待たれつつ。（古今・十五）

今はとてかへす言の葉拾ひおきておのがものから形見とやみん。(古今・十四)

ねたきものからえたへでわらひぬ。(源氏・紅葉賀)

以上の中「が」「ものの」は文語にも口語にも共に行はれ、「ところが」は口語に「ものから」は文語にのみ行はれるのである。

前件が軽く後件が重くなる傾向の陳述語の綜合性的並列は、前件の陳述語の連體形に助詞「に」が添加せられる形を基本とし、その外「のに」の添加せられるものがある。

「に」を用ひるものゝ例

折もあらうに今急しい時にどうしたのだ。早く來ればよいにまだ來ない。

旅にして物戀しきに山下の赤のそほ船沖に傍ぐ見ゆ。(萬葉・三ノ二七〇)

屢試みたるに一度も功を奏せず。

上野に物せしに花は満開なりき。

「のに」を用ひるものゝ例

呼んでゐるのに返事もしない。

寒いのにひとへものを着てゐる。

まだ早いのにもう歸るのか。

風も吹かぬのに花が散る。

以上の中「に」は主として文語に行はれ、「のに」は専ら口語に行はれるのである。

前件が重く後件が軽くなる傾向の陳述語の綜合性的並列は、前件の陳述語の連體形に助詞「を」が添加せられる形を基本とし、その外「ものを」「ことを」などの添加せられるものがある。

「を」を用ひるものゝ例

いつしかみ崎といふ所わたらむとのみ思ふを風浪ともにやむべくもあらず。(土佐)

椎の木常磐木はいづれもあるをそれしもはがへせぬためしにいはれたるをかし。(枕)

「ものを」「ことを」を用ひるものゝ例

あんなにほしがるものを取りあげてはかはいさうだ。

ねてゐても苦しいものを起きすることはとてもできん。

人が親切でするものをありがたいと思はぬ。

行くはずであつたものを行かなかつた。

せずともよいことを餘計な事をした。

以上の中「を」は専ら文語に、「ものを」「ことを」は専ら口語に行はれるのである。

五

陳述語の綜合的な並列關係に對し、分析的なる並列關係といふのは、前件が後件の明確な條件として與へられ

る關係をなすものである。所謂、條件法とか條件運用とかといふものである。前の陳述と後の陳迎とが因果的に分立するものである。之を前件の後件に對する關係性により、略々次の如く區別することが出来る。

條件的並列

前件が後件の理由を言ふもの……………（理由條件）

前件と後件とが事實關係をなすもの

繼起的關係のもの（當然條件）
必然的關係のもの（必然條件）

理由條件的並列は單なる事實間の相關々係ではなく、前件の陳述が後件の理由となるものである。前件が後件事實の生起する理由とか原因とかといふものを陳述せる關係である。即ち前件が理由で、後件が事實である並列關係である。かゝる理由條件を構成するには連體形に助詞「から」を添へる。例へば

勉強するから學問が進む。

おかしいから笑ふ。

この役を持たせられたからどこまでも力めます。

いつまでたつても勝負がつかないから、烏と獸とが仲直りをしました。

かやうにいろ／＼の影響があるから見る人によつて文學の批評も違ふ。

の如きものである。しかしして此の「から」助詞は起點的補格を示す場合に添へられるものであるが、之をすつかり出來てからおぢいさんに見ていただきますと……

正雄さんはていねいに見てから、「たいして悪くはないやうです。たべすぎですね。」と、まじめな顔をして言ひ

ました。

うさぎの良雄さんは少し考へてからいひ出しました。

の如く、次續的並列の「て」の下に添へると著しくその「て」の意味が強化せられるのである。

理由條件の並列關係は、前件が理由を陳述し後件が事實を陳述するものであつたが、之に對して前件後件が單なる事實間の關係性を言表すために並列せられるものがあるのである。謂はゞ事實關係的な條件並列である。之には前後關係が單なる繼起的現象として連なるもの、即ち當然的な條件並列と、兩者の間に何等かの必然的關係が介在すると見る必然的な條件並列とがある。前者は前後の因果的關係が必然的であらうとなからうと、さやうな事に向頓着なく、只管當然的に生起して行く事實現象のありのまゝを分節的に爲さんとするものである。かゝる當然的條件を構成するには連體形に助詞「と」を添加するのである。例へば

雨が降ると涼しくなる。

早く行かぬと間に合はぬ。

目が見えないと不自由なものだ。

あまり長いと折れる。

打つとひどく。 珍らしいともてはやされる。

押されると倒れる。 讀ませると分る。

或は

汽車から下りると雨が降つてゐた。

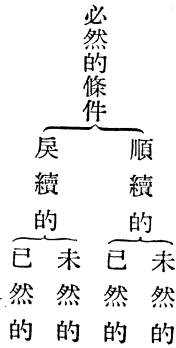
家へ歸ると日が暮れた。

木から落ちると實が二つに割れた。

讀ませると分つたと言つた。

の如きものである。しかしして前の例の如きものは略々必然的なものを寫してゐるとも言ふことが出来るが、後の例の如きものとなると前件後件の間に何等の必然性をも見ることの出来ない單なる事象である。

必然的條件の並列に關しては更に次の如く區別しなければならぬ。



右の中順續的といふのは、前件に對し後件が期待通りの結果となるべき正項的な必然關係を豫想して立てたる條件の並列であり、戻續的といふのは前件に對する後件が期待に反する結果を齎す負項的な必然關係を豫想して立てたる條件の並列である。又未然的といふのは前件が後件に對する條件として、未だ判然たる事實となつて實現せられてゐない假設假定の條件並列であり、已然的といふのは已に事實として實現せられてゐる確定的な條件の並列である。

未然順續條件は文語では

後患なくば僥倖のみ。

我死なば後事を如何せむ。

折りとらば惜しげにもあるか。(古今・一)

の如く未然形に助詞「ば」を添へて構成する。口語でも

よくば参らう。

見たくば見る。

行かずばなるまい。

の如く、形容詞又は形容詞系統の助動詞に於て多少文語の名残を止めてゐるが、一般的ではない。只次の如きものがあつて可成廣く行はれてゐるのである。

一、形式動詞「な」の未然形「なら」によるもの。

二、助動詞「た」の未然形「たら」によるもの

この兩者とも、そのまゝ或は助詞「ば」を添へて行はれるのである。しかして「なら」は實體語、從屬語、或は陳述語の終止形に接するものであり、「たら」は動詞の連用形に接するものである。次に之等に關する用例を少しく掲げて置かう。

「なら」を用ひるものゝ例

(イ)實體語に接したもの

雪溪が冬の世界ならば此所は春の國でせう。

それだけのお金ならば私が差上げます。

そんなら一日にいくら儲かるね。

雨なら止めよう。

(ロ)從屬語に接したもの

静かならば寝つかれよう。

いやならよせ。

(ハ)陳述語の終止形に接したもの

若し一層早く列國に交つて居つたならば更に發達の跡が著しかつたであらう。

そんな事を言ふならこつちにも考がある。

よし、寒いなら暖くなるやうにしてやる。

「たら」を用ひるものの例

顔や様子の違つてゐるお前が向かふへ行つたらどんなひどい目にあふかも知れない。

もしわしが死んだらお前はその後どうする。

書いたらば渡しなさい。

已然順續條件は文語では

年歴れば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし。(古今・二)

水清ければ大魚住まず。

の如く已然形に助詞「ば」を添へて構成する。口語では

好きなればこそ上手になつた。

左様なれば頂戴いたさう。

静かなればこそこんな山にも住んでゐる。

昨日行つたれば居なかつた。

の如く「なら」「たら」を用ひるものに存するが之等は餘り行はれない。しかも同じく已然形に「ば」を添へる形のものでも

讀めばわかる。

それさへ引受けて呉ればこちらは大助りといふものだ。

さうすればかうしてやる。

長ければ切ります。

見たければ見せてやる。

の如き一般の陳述語に於けるものは已然順續條件ではなく、寧ろ假設的な未然順續條件である。

未然・展續條件は助詞「と」「とも」「も」などを添へて構成するものである。其中「と」「とも」を添へるものは文語の普通の形で

嵐のみ吹くめる宿の花薄穂に出でたりとかひやなからむ。(蜻蛉)

繪に書くと筆も及ばじ少女子が花の姿を誰に見せまし。(堀川後百首)

愛敬無くと言葉しなめきなどいへば(枕)

或は

せきいれたる名こそ流れてとまるとも絶えずみるべき瀧の絲かは。(後撰・十八)

大和べに風ふきあけて雲はなれそきをりともよ吾を忘らすな。(丹後風土記)

こゝろこそちぎりしまゝにかはるとも同じ空なる月や見るらむ。(續後撰・十四)

花の色は霞にこめて見せずとも香をだに盗め春の山風。(古今・二)

一の悲字なくとも既に心動きて禁ぜざるものあらむ。

の如く、動詞系統のものでは終止形に添へられ、形容詞系統のものでは連用形に添へられるのである。口語でも

どんな事があらうと必ずやり遂げてみせる。

行かうと行くまいと僕の勝手だ。

見てゐようと見てゐまいとやるべき事はやれ。

或は

待たれるとも待つ身になるな。

どこへ行くとも心のまゝだ。

どうするとも勝手にしなさい。

遅くとも十日に来る筈だ。

金は無くとも智慧さへあればよい。

の如く多少限られた範囲で行はれる。

「も」を添へるものは主として口語に行はれる形のものであるが、口語では「でも」「ても」「連濁すれば「でも」の形として行はれる。言ふまでもなく「でも」は實體語、從屬語を受け（陳述語の終止形は受けない）、「ても」は陳述語の連用形を受けるものである。今之等の用例を二三擧げて置く。

「でも」を用ひるものゝ例

顔は人でも心は鬼だ。

これでも本音を吐かぬ。

もとは君のでも賣れば人のものだ。」

今は穩かでも安心は出来ぬ。

うはべはどうでも中味が大切だ。

「ても」を用ひるものゝ例

誰がやつても同じ事だ。

少しぐらゐ高くても買ひませう。

御恩は死んでも忘れません。

文語でもこの「も」が用ひられることがある。その場合には

矢は當らざりしも痛手はおひぬ。(平治)

人はいみじくたけくも力及ばぬことなりけり。(愚管抄)

同じ御子豫王を立てられしもまた捨てゝ自ら位に即き給ふ。(神皇正統記)

期限は今日に迫りたるも準備は未だ成らず。

の如く、動詞系のもは連體形に形容詞系のもは連用形に添へられる。

已然順續條件は文語では已然形に「ど」「ども」を添へて構成する。例へば

青によし奈良の大路はゆきよけどこの山路はゆきあしかりけり。(萬葉・十五ノ三七二八)

色は匂へど散りぬるをわがよ誰ぞ常ならむ。

口に言ふは易けれども實際に行ふは難し。

あやしき下腐なれども聖人の誠にかなへり。

の如きものである。然るに口語では終止形に「けれど」「けれども」を添へて構成するのである。例へば
辯明はするけれどもどうも怪しい。

随分火は焚くけれどもなか／＼暖まらぬ。

わるいけれどこらへよう。

忙しいけれどもお世話はしませう。

しないけれどもしたと同じだ。

そんなことはあるまいけれどもどうも気がかりでならぬ。

の如きものである。

六

以上は實體語と實體語との並列、及び陳述語と陳述語との並列に就いて述べたのであるが、之等獨立語の並列關係に對して從屬語相互の並列關係も考へることが出来る 例へば

穩かにねんごろに教へる。

いよ／＼益々感心される。

露に逢ふと草が如何にも涼しさうに且新鮮に見える。

あてにうつくしげなり。

又かすかにていゝなる文字あり。

の如きものである。勿論

大變結構な品

少々不足に思ふ。

いとねんごろにとひたまふ。

もうちよつと左

の如く、低次の從屬語が高次の從屬語に連なるものは並列關係ではなくて修飾關係である。從屬語の並列は常に觀念性が同次元的でなければならぬ。而も又同次元的觀念性のものであるならば、陳述語に對しても同格的に並列するのである。それは即ち形容詞に對して狀態的屬性觀念の從屬語が關係する場合であるが、例へば

素直に大人しく言ひ給へ。

にこ／＼と愛くるしい。

勇ましく元氣に行進する。

元氣よく無事に歸還した。

の如きものである。

かたちなどよからねどかたはに見ぐるしからぬわかうとなり。（源氏・夕顔）

父の年老いものむつかしげにふとりすぎ、せうとの顔にくげに、おもひやりことなる事なきねやの内に、いといたく思ひあがり、はかなくしいでたる事わざも故なからず見えたらん、かたかどにてもいかゞ思ひのほかにかしからざらむ。（源氏・帚木）

の如きものも、矢張かやうに考へなければならぬと思ふ。「かたはに見ぐるし……」「思ひの外にをかし……」は態的屬性觀念間の並列關係である。しかし

大變美しい。

實に善い。

の如く、程度的な從屬語は形容詞に對して

大變綺麗だ。

實に善良だ。

などの場合と同様、その修飾素であることは言ふまでもない。又從屬語一般は、現象觀念の動詞や實體觀念の體言に對し如何なる場合と雖も並列することが出来ないものである。形容詞に對しても實は觀念的には並列するものがあるのであるが、陳述語としての形容詞全面に對し眞に並列するのではないのである。故に「かたはに見ぐるしからぬ云々」「思ひの外にをかしからざらん」などの否定的陳述は先行の「かたはに」「思ひの外に」をも同格的に受けることとなるのである。但し之を「かたはならぬ、見ぐるしからぬ云々」「思ひの外ならざらん、をかしからざらん」のやうに恰も陳述語の並列の如く見るのは粗略ではないかと思ふ。

並列關係は一見機能範疇に對し何等寄與するところがないかのやうではあるが、實は最も廣汎に觀念語を規定してゐるとも言へるのである。勿論それは消極的である。裏附するに過ぎないものである。修飾關係などに於てはかくくのもののはかくく／＼の範疇であると言つた積極的定義づけの資料を提供するが、並列關係では裏面から之を検證し支持するに過ぎないのである。此の點、並列關係は修飾關係と全く對蹠的な文法の事實と言はなければなら

らぬ。

先づ獨立語は相互に對立關係に立つことが出来るのである。從屬語の如きも統合關係に於ける賓位觀念となることが出来るのであるが、それは眞に獨立語に對立するものではなく、形式動詞の如きものと合體し形式動詞の陳述力によつて始めて獨立語に對立し得るのである。眞に對立關係に立つことの出来るものといへば實體語や陳述語等の獨立語のみである。しかし、實體語と陳述語とは相互に並列關係に立つことは出来ない。主語とか述語とかといふものとなつて統合關係に立ち得るだけである。實體語に並列するものは常に實體語でなければならず、陳述語に並列するものは常に陳述語でなければならぬ。陳述語の中には動詞と形容詞とがあるが、この兩者は觀念性的次元を異にするものであるから、直接的に相關係する場合は普通には並列しないのである。形容詞が動詞に先行すればそれは常に修飾關係となり、只後行せしめ得る時だけ僅かに並列關係が成立つ。眞の並列關係は、形容詞なら形容詞、動詞なら動詞相互の間に於てのみ成立つのである。從屬語の中でも、形容詞と觀念的次元を略々等しくせる狀態的なものはその並列性は形容詞と大體に於て同様と見てよい。しかし形容詞にク活シク活の二別があるやうに、狀態的從屬語にも感覺的情緒的の區別があり、それらはそれぞれ獨自の並列性を執るものである。程度的從屬語は殆んど從屬素として發達したものであり、陳述的從屬語とか感動的從屬語とか接續的從屬語などは全くの從屬素であり隨つてそれらの對立や並列などといふことに就いて餘り問題にする必要もないものである。しかし若し並列するとすれば、それ／＼同類的なものが並列するのである。

かやうな譯であるから、並列關係は同一機能範疇に所屬すべき語辭をどこまでも彙集して行くことによつて消極

的に言語の機能範疇に寄與すると言ひ得るのである。しかも最も廣汎に、その消極面を一切引受けてゐるのである。修飾關係などによつて積極的に定義づけられて行く言語の機能範疇は、並列關係によつて一々その後始末をせられて行くとも考へ得るのである。或範疇に屬すべき語に並列する語は總てその範疇に所屬すべきものであり、その逆も亦真でなければならぬ。並列關係は機能範疇に對する充實原理である。修飾關係などは機能範疇の形相的なものを描出するものとすれば、並列關係はその質料的なものを充すものである。

七

並列關係に關聯して一應吟味して置かなければならぬことは、複文とか重文とかと稱せられてゐる文の複合問題である。一體文の單位とか複合とかといふことは古來我が國の文法學上に全然現れなかつたものである。本居春庭の詞の通路下卷に説かれてゐる事柄は、文章論の端緒であるかの如く言ふ人々もあるのであるが、それは文の單複とか構造とかを説明せるものではなく、標題に「詞天爾乎波のかゝる所の事」とある如く、言語の連續斷止に關する文法の具體的事實を例説せるものと見なければならぬ。しかしかやうなことから世に稱せられてゐる如き文の單一的であるとか複合的であるとかと言つた考は絶對に出て來ないのである。單文とか複文とか重文とかといふことを云々するのは、西洋流の論理的文典を學んだ後の我が國文法學界に現れた特異な現象の一つでなければならぬ。

かやうな文の單複といふことが考へられる前に、普通先づ文の定義が爲されるのである。勿論それはさもあるべ

き事であるが、その定義たるや多く西洋文典の焼直しに過ぎないのである。しかもその西洋文典の源流はギリシャ文典であり、ギリシャ文典はギリシャ論理を本流としてゐるのである。言語記號としての文法事實そのものから來たものではなく、論理學的坍塌から流れ出た文の定義である。文をロゴスの考へてゐる。主語と述語との統合關係といふものを常に文定義の優先的條件としてゐる。勿論長い文法學史の間にはかやうな考から逸脱して現實の文法的事實の眞實に立たうと試みたことも度々あつたものではあり、殊に近時著しく文法學再建の氣運が向いて來ると共に、文に對する考へ方にも種々の形で反傳統的のものが現れるやうになつて來たのである。或ものは之を言語學として語群體の如きものとして特徴づけんとするのである。しかし大體の主流といふものは、手を變へ品を變へ、矢張主述の統合を以て文を考へようとしてゐるやうである。例へばバイイの如きですら、判斷の傳達である (*Une phrase est la communication d'un jugement*) と言つてゐるのである。勿論その判斷といふものの考へ方は形式論理學そのまゝのものではない。しかし、之を陰在的表象の確言による現示である (*Une jugement est une représentation virtuelle actualisée par une assertion*) などと言つてゐる以上、現示さるべき表象と現示する確言の統合を考へてゐるのである。かやうな文の考へ方が、西洋文典の洗禮を受けて以來常に我が國の文法學の文定義を支配してゐるのである。

主語と述語との統合關係を以て文を定義して行けば、それ以外の完結言表となり得る呼掛、感嘆、願望の如きものを如何に考へようとするのであるか。勿論之を原始的のもの、幼稚のもの、不完全のもの、準ぜられたるものな

どと言つたやうに、消極的に處理してふことも出来るであらう。しかし、私は如何にその内部組織に於て幼稚なるものであつても、之等をこそ最も原本的根源的な文としなければならぬと思ふのである。急迫せる場合、激越せる場合、幼児期、總て赤裸々なる人間性に於ては、寧ろかやうなものが言表の主體となつて來るのである。理性人の冷靜時に於てのみ文が在り得ると言つたやうな前提でもない以上は、統合關係的なものを只管基準として文を考へようとすることは無謀の沙汰と言はなければならぬ。文の定義は言表として一先づ完結して行くあらゆるものを包含せしめ得るものでなければならぬ。統合關係を超え、一段と高い立場から定義しなければならぬ。しかも單なる心理學的見地とか外形的觀察を以てしたり、或は之を只拒否して終ふニヒリズムに陷つてはならぬ。内的外的の兩面から之を克服し、どこまでも息まないものでなければならぬ。かくて其の本質的核心を把握する近道は、寧ろ統合關係的なものを後廻しにし、より原本的なもの、より根源的なものの中に直ちに突入するところにあるのである。此處に於て、統合などといふやうな連續性を超えた斷止性に文の本質的條件の寓在を知ることが出来るであらう。

かくる積極面的考察を進めると共に、他方消極面的考察を行つて行くことにより文に對す概念が一層明確なものとなり、且複文とか重文などと言つた文の複合問題の真相も明かにすることが出来ると思ふ。それは即ち主述を具へた統合關係のものでも必ずしも文とまらないものの有ることである。原始的であるとか不完全であるとかと謂はれる呼掛感嘆の如きものですら主述統合の文と同格的でなければならぬ。文對等語とか語文とかと稱せられるものすらある。之等の存在を統合文は如何ともすることが出来ないのである。消去することも包攝することも出来ない。

のである。故に同格物として並列的に考へて行かなければならぬのである。然るに文の優先的條件とせられる統合関係のものの中には、必ずしも文となり得ないものが多數に存在してゐるのである。勿論統合関係の構造のものは文として立つ場合は極めて多い。しかしそれと同時に、文構成の一部分となり文肢と稱せらるべきものとなる場合も之に劣らず多いのである。そこに複文とか重文とかといふものが考へられるのであらう。文の複合といふことが文法學上の問題として考究せられるのであらう。しかし

冬は寒いし夏は暑い。

空はいよ／＼すんで月はいよ／＼明るい。

花咲き、鳥鳴く。

の如きものや

冬は寒いが夏は涼しい。

こんなに海が荒れるのに君はよく平氣でゐられるね。

月の光は同じいけれど、月の照す風物は同一ではない。

雪溪が冬の世界ならば此所は春の國でせう。

の如きものは、統合関係の同格的並列であるから、或は重文とか複文とかといふものと考へられるかも知れない。しかし

栗のいがゑむのも今である。

名のわからぬのが残念だ。

それは鴉の行水するのを見てゐて、つひたまらなくなつたのです。

竹の無い所へ行くと今更のやうに竹の効用の廣いのに驚かれる。

品性の高潔な人は世に尊敬せられる。

後の方から見上げるやうな大きな水の堆積が、想像も及ばぬ早さでひた押しに押して来る。

或は

神代の質素な様も想はれて、此の上もなく尊い。

その不思議な沈黙が互に呼びかはす、慘らしい叫び聲よりも、却て力強く人々の胸に響いた。

萬事都合よくいつた。

の如く後行素に従属する統合關係のものは文と稱することが出来るであらうか。山田博士はかやうなものを附屬句と言つて居られ、その附屬句を包攝せる文を有屬文と稱して居られるが、かゝる有屬文中の附屬句の如きものが文としての資格を有するものであるかどうか。

勿論主述の統合體であるからそれは文でなければならぬと言つてしまへばそれまでであるが、それでは餘りにも無反省なる議論であると思ふ。主述の統合といふことがなくとも、文となり統合文と同格的に考へなければならぬものは多數ある。否寧ろ實際の言語活動を調査して見れば、或はかやうなものの方がより多く行はれてゐるといふ結果を得るかも知れぬ。兎も角主述の統合といふことは文の本質的條件ではないのである。種々の文の中、更に之

を特殊なものに區別せんとする爲の下位的條件でなければならぬ。例へば陳述文とか述體文とかと言つたものの特徴となるのである。しかし、右に掲げた例の「此の上もなく……」「力強く……」「栗のいがのゑむのも……」の如きものは陳述文などと稱することが出来ぬ。主述統合の陳述形式を具してゐるが、直ちに之を文と稱することが出来ない。文と同格的ではない。言語連續の要素的なものとなつてゐるに過ぎない。連續關係の中に在るものである。語の如き一次的な連續要素に對する、語の結合による二次的な連續要素となつてゐるのである。かやうな二次的連續素を私は總て句と稱するのである。故に右の如きものは從屬せる文ではなく、統合關係的構造の句でなければならぬ。文は絶対に從屬などをする事の出来ない言語の極限的なものでなければならぬ。文が語に從屬し節となるなどと言つた考へ方は全く自家撞着である。文は言語の絕對者であり、文法活動の宇宙である。文の外は單なる思念の世界であり、更に語彙的なものとも直面する非文法的なる世界でなければならぬ。かゝる文がその要素的な語に從屬するなどといふことはあるべき筈のものではないのである。文が從屬すると考へられるものは實は句の從屬でなければならぬ。殊更陳述的な句の從屬である。随つて有屬的な複文などといふことを立てる必要は絕對にないのである。更に從屬關係的なもののみではなく

花咲き、鳥鳴く。

花咲けば、鳥鳴く。

などの對立關係的なものと雖も、それが連續的である限り文といふことが出来ない。重文とか合文とか稱せられるものも文の複合ではなく、句の複合と見なければならぬのである。それは並列的に連結せられてゐるといふだけで、矢張二次的言語である句を以て組織したものと見なければならぬのである。勿論並列體であるだけ、其の要素

である句の矛盾的結合は修飾の句などのそれに比し生動的である。しかし、かゝる副次的内容の如何は別として本質的形相としては常に句と考へて行かなければならぬのである。かやうな譯で、文法學上文の複合などといふことは一般に不合理な概念と見なければならぬ。それは文といふことを眞に即實的に考へ抜いてゐないところから來る派生的問題と見なければならぬ。文といふものを主述の統合によつて考へる限り、當然その複合といふことを文法問題としてどうしても取扱つて行かなければならぬのである。統合的結合の複合状態といふものを考へて行かなければならぬのである。しかしかやうなものは總て修飾關係の句、補充關係の句、並列關係の句などの場合と同様に考へて行つて差支ないものである。一次的な語の上に成立せる、二次的な句の連續の一種と考へて行けば事足りるのである。